

GENDER に対する態度と男女平等意識

佐野 幸子

I. 問題

文化社会的に規定される性別 (gender) の研究は、多方面、多次元から行われている。これらの研究が興隆しはじめた1970年台には、性役割 (sex role、または gender roll) 研究と、男女平等意識の研究が代表格として挙げられる。この時期のこれらの研究を測度の次元から注目すると、性役割は二次元であり、男女平等意識は一次元となっている。

性役割とは、性別という「位地」に対して、社会が共有する行動期待である。性役割研究の古典ともいえるべき、Bem, S.L.(1974、1975) の両性性理論は、男性性と女性性を単次元の二極性モデルではなく、男性性と女性性を二次元であるとしたものである。彼女は、その後の Spence, J.T.ら (1975) の提案も受け入れ、男性性・女性性ともに高く有する両性性こそ、自己の性別による役割にとらわれず、よりその場に適応した行動をとることができるとした。両性性理論では、適応のために男女という「位置」にとらわれず行動をとることが良いと仮定している。この理論については、多くの追試がなされているが、必ずしも一定した結果がでていないわけではない。佐野 (1992) も就業生活の適応について、社会人を対象に研究を行った。結果は、両性性理論を否定するものではなかったが、男性性のみでも適応予測が可能であることが明らかとなった。また、両性性理論に対しては、両性性の人間は心理的にうまく機能するのか、社会に適応できるのか、性の同一性を失うことにならないのか、といった批判も多くなされている。

Spence, J.T.ら (1978) は、性役割研究で使用された測度をみると、男性性は道具的性格を、女性性は表出的性格を表しており、それが、普遍的な男性性・女性性をさすとは言えないと指摘している。

以上のように、性役割研究は、測度、さらには概念の妥当性を確保できたと言い難い。

このような研究の歴史のなかで、Bem, S.L.は、Gender schma theory (1981) を提案する。これは、性タイプ化された人間は、知識構造の一部として性別を軸とした自己概念をもつと主張するものである。さらに、Gender schma の形成・非形成により、性役割に適合する行動をとるか否かを予測できるとしている。この研究での測度は、実験上では反応時間を使用し、概念的には、性別で判断するか否かという一次元のものとなる。

男女平等意識の測度としては、フェミニスト的態度を

測る Spence, J.T.と Helmreich, R. (1972) による AWS (Attitudes Toward Women Scale) や、性役割志向性 (伝統的か反伝統的か) を測る Dreyer, D.A.(1981) の ISRO などがあげられる。これらの尺度はいずれも一次元のものである。ただし、フェミニズムを背景としているためか、女性への態度を中心に据えており、男女を含めた上での性別に対する傾向を測るものではない。また、我が国における研究には、アメリカで作成された尺度の翻訳を使用することが多いが、その妥当性に疑問が残る。

佐野 (1990a、1991a) は、性役割の成立条件として、社会が共有する期待を生じさせるほどに、性別が「位置」として認識されるのか否かの個人差に注目し、これを対性別態度 (attitude toward gender) と命名した。そして、対性別態度を測定する一次元尺度を開発した。これは、同一項目を使用し、一般的な男性および女性に対して、どのような評価、感情を持つかを問うものである。得点化では、男性に対する回答と女性に対する回答の差を使用し、回答者が男性と女性に対し、異なった判断をする程度、つまり対性別態度を数値化する。この尺度を使用し、一般的な男女平等意識や就業への男女平等期待を研究したところ、対性別態度が高い者 (=性別によって異なる反応をする程度が高い者) は、男女平等への意識や期待が低いことが明らかとなった。この仮説検証結果は、性別に関わる研究を、一次元尺度を用いて行うことの有効性を支持するものである。しかし、同研究において、対性別態度尺度ではなく、クロスタイプ得点のほうが、高い説明力をもつことも明らかとなっている。クロスタイプ得点とは、対性別態度尺度で得られた回答を、性役割尺度と同様の方法にて計算し、ステレオタイプに反するクロスタイプ特性 (男性に対する女性特性と女性に対する男性特性) の得点を合成したものである。

II. 研究の目的と仮説

本研究目的の中心は、対性別態度を測定する新尺度を作成・検討することにある。

佐野 (1990a、1991b) の研究にて、対性別態度より、クロスタイプ得点の方が高い説明力をもった理由として、社会に残る根強い性別ステレオタイプの存在が考えられる。

Seward, G.H.(1946、1956) は、第二次世界大戦後のアメリカを評し、性役割についての自己意識がきわめて少なくなり、個人が選択できる自由が多くなってきたため、

性役割の収束が生じるとしている。佐野は、この収束がある程度生じていることを前提とし、性別に対する尺度を使用した。しかし、性役割が強く残っている場合、対性別態度の分散は少なく説明力は低くなるため、性役割を直接的に測定した値のほうが有効となる。非常に強い性役割が存在する時代においては、ステレオタイプ得点をもっとも有効となり、性別に対する態度変容の過渡期には、ステレオタイプへの反発傾向が生じるためクロスタイプ得点が無効になるのではないだろうか。

先述の佐野の研究より10年が経ち、21世紀を迎えた現在では、性別に対する態度はどのように変化したであろうか。本研究では、先に作成した対性別態度尺度を使用し、以下の研究をおこなう。第一に、対性別態度尺度の妥当性、信頼性を検討する。第二に、対性別態度尺度と男性性・女性性の二次元で測定する性役割尺度との比較を行う。第三に、対性別態度尺度の妥当性を男女平等意識尺度によって検討する。第四に、性別に関わる変数と男女平等意識の関連について以下の仮説検証をおこなう。

仮説1：伝統的な性役割意識をもつ者は、男女平等意識が低い。

作業仮説1：男女平等意識とステレオタイプ得点は、負の相関を示す。

作業仮説2：男女平等意識とクロスタイプ得点は、正の相関を示す。

仮説2：性別にとらわれない態度を有する者は、男女平等意識が高い。

作業仮説3：男女平等意識と対性別態度は負の相関を示す。

Ⅲ. 方法

1. 調査の構成

調査は3分割される。

被験者は、いずれも文化系私立四年制大学に、2000年もしくは2001年に入学した女性であり、以下の3つの調査に順次参加した。

調査A：自己の性役割観

性別に関する29項目を使用して、「あなたは、次にあげる行動傾向や特性を、どの程度もっていますか。」と問い、「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5段階で回答を求めた。調査は集団法にて、1年次対象講義を使用して、2000年5月、10月、2001年5・6月に、2年次対象講義を使用して2000年5月に実施した。

調査B：対性別態度

性別に関する29項目を使用して、一般的な男性または女性に対する態度を感情次元にて尋ねた。「あなたは、次にあげる行動傾向や特性をもつ男性（女性）に対し、

どのような感じを抱えていますか」という問いに対し、「非常にいやな感じ」から「非常にいい感じ」までの5段階で回答を求めた。1年次対象講義を使用して、2000年5月、10月、2001年5・6月に、2年次対象講義を使用して2000年5月に実施した。

調査C：男女平等に対する態度

SpenceとHelmreich(1987)が作成したAWSを使用した。項目は、「女性が下品な言葉を使った場合、男性がそれを使うよりも聞き苦しい」、「女性が家庭外で活動している現代の経済状態のもとでは、男性も皿洗いや洗濯のような家事を分担すべきである」、「結婚の申し込みは女性からも自由にしてよいはずだ」など15項目である。7項目は反転項目となっており、「非常に賛成」から「非常に反対」まで4段階で問う。

合成得点は、平均値を使用し、高得点ほど男女平等的となるようにした。1年次対象講義を使用して、2000年7月、2001年1月、2001年7月に、2年次対象講義を使用して2001年1月に実施した。

2. 被験者数

性別に関する29項目を使用した尺度、対自己、対男性、対女性の3種については、いずれかの回答が欠損であるデータを分析対象から除外した。また、他の項目においても欠損が多い者、3年生以上の者、25歳以上の者のデータを除いた。その結果、性別に関する項目を使用した調査では、2000年前期1年生122、2年生70、2000年後期実施1年生132、2001年前期実施1年生95、計419となる。男女平等意識については、2000年前期1年生104、2年生62、2000年後期実施1年生124、2001年前期実施1年生69、計359となる。

3. 性別に関する尺度の項目

対性別態度尺度は、1990年に佐野が作成した尺度51項目より29項目を選択したものをを使用した。この1990年の尺度は、以下の要領で作成された。第一に、過去作成された性役割に関する尺度(Attitudes toward Women Scale, Spence, J.T. & Helmreich, R.L.1978; Bem Sex Role Inventory, Bem, S.L.1974; Sex-Role orientation Inventory, Dreyer, D.A., Woods, N.F. & James, S.A. 1981; 性役割尺度若林・後藤・鹿内1982など)の項目を収集する。さらに、「一般概念では、『性別で区別(または差別)されるべきだ』とされていること」「一般的感情では、『性別で区別(または差別)されるのが好ましい』とされていること」という指示のもとに大学院生十数名に自由記述をもとめ、先の項目に付け加えた。このようにして、収集した項目は、500項目以上となった。第二に、これらの項目において同義語を整理し、さらに、現状には合わない、意味を把握しにくいなどの条件により、210項目にまで削除した。第三に、この210項目について5段階での回答を

Tab. 1 自己の性役割観、性別に対する態度尺度における項目平均と差の検定

	自己 MEAN(SD)	対男性 MEAN(SD)	対女性 MEAN(SD)	[対男性-対女性] MEAN(SD)	対男性・女性 t 値
男性特性項目					
たくましい	3.02(1.00)	4.26(0.77)	3.75 (0.89)	0.89(0.83)	9.32**
決断力のある	2.91(0.95)	4.61(0.69)	4.43 (0.65)	0.51(0.70)	4.41**
頼もしい	2.86(0.91)	4.49(0.74)	4.25 (0.74)	0.72(0.75)	4.83**
行動力のある	3.25(1.00)	4.55(0.66)	4.46 (0.63)	0.49(0.66)	2.46*
指導力のある	2.78(0.99)	3.87(0.96)	3.95 (0.81)	0.69(0.73)	-1.60
大きな責任をもつ仕事に就く	3.14(0.94)	4.13(0.87)	4.30 (0.74)	0.60(0.78)	-3.53**
家計の主たる収入をかせぐ	2.40(1.11)	4.32(0.89)	3.69 (0.88)	1.15(0.89)	9.79**
結論を下す	3.02(0.96)	3.64(0.98)	3.66 (0.89)	0.75(0.78)	-0.51
企業で高い地位につく	2.65(0.96)	4.01(0.90)	4.16 (0.82)	0.69(0.75)	-3.04**
異性を積極的にリードする	2.49(0.97)	3.96(0.99)	3.26 (0.92)	1.21(1.01)	10.21**
家庭内での大工仕事をする	2.06(1.10)	4.31(0.92)	3.39 (0.99)	1.25(1.02)	14.27**
肉体をきたえる	2.34(1.12)	3.59(1.02)	3.02 (1.00)	0.97(0.92)	9.72**
多くの社会活動に参加する	2.69(0.95)	3.86(0.92)	4.09 (0.86)	0.50(0.73)	-5.45**
知能能力の要求される仕事に就く	2.92(0.98)	4.08(0.85)	4.20 (0.78)	0.53(0.71)	-2.69**
経済的、社会的自由を得る	3.58(0.85)	4.13(0.89)	4.24 (0.83)	0.56(0.76)	-2.41*
女性特性項目					
こまやかな	3.04(0.88)	3.26(0.98)	4.10 (0.82)	0.97(0.84)	-18.14**
おとなしい	2.71(1.01)	2.42(0.92)	2.77 (0.84)	0.77(0.76)	-6.99**
繊細な	3.10(1.01)	2.96(1.02)	3.65 (0.98)	0.98(0.87)	-12.76**
献身的な	3.34(1.01)	3.71(0.93)	3.84 (0.96)	0.63(0.75)	-2.65*
育児のために仕事を辞める	2.99(1.18)	2.59(1.11)	3.16 (0.88)	1.09(1.02)	-8.42**
化粧をする	3.76(1.16)	1.78(1.06)	3.94 (1.00)	2.43(1.15)	-27.43**
家族のために毎日食事を準備する	3.12(1.30)	3.45(1.03)	4.18 (0.89)	1.22(1.00)	-10.70**
掃除や洗濯をする	3.59(1.07)	3.93(0.90)	4.21 (0.80)	0.84(0.84)	-5.04**
職場でお茶をいれる	2.83(1.07)	2.60(1.14)	2.95 (1.01)	0.93(0.94)	-5.68**
食事の後かたづけをする	3.79(1.02)	4.10(0.79)	4.10 (0.86)	0.80(0.81)	-0.13
幼児保育の職業に就く	2.10(1.10)	3.53(0.96)	4.01 (0.82)	0.78(0.80)	-9.65**
編み物をする	2.31(1.24)	2.26(1.07)	3.56 (0.91)	1.49(1.09)	-20.20**
病院で看護職に就く	1.73(0.94)	3.60(1.01)	4.11 (0.81)	0.72(0.80)	-11.06**
子どもの世話をよくする	3.51(1.17)	4.61(0.66)	4.65 (0.63)	0.37(0.64)	-0.93

求める質問紙を作成し、大学院生他約20名に実際に回答、かつ項目についての意見を求めた。その結果、判りにくい、得点に分散が低いなどの基準にて、さらなる削除をおこない67項目まで整理した。第四に、これら67項目を使用し、私立大学文学部学生（男性75名・女性183名）を対象に調査をおこなった。被調査者の意見から意味が判りにくい、多義に取れるといった項目および、分散があまりにも小さく、かつ対象の性別での得点差が小さい項目を除外し、51項目に整理した。第五に、51項目を男性特性30項目、女性特性21項目に分割し、対象や被験者の性別に因子分析をおこなった。これらの結果には、共通する因子を見いだせなかったため、さらに、男性特性項目については対象者男性・被調査者女性の分析結果をターゲットとし、女性特性項目については対象者女性・被調査者女性の分析結果をターゲットとし、Procrustes回転させた。その結果を元に、対象者および被調査者の性別それぞれで因子構造が共通し、かつ性役割尺度または、対性別態度尺度と使用しても分散が維持される29項目を採用した。

IV. 結果

1. 性別に関する項目

性別に関する29項目を使用した、自己の性役割観、他者への性役割意識（一般的な男性に対する態度、一般的な女性に対する態度）、以上3種の項目平均および、対男性と対女性間の差の検定結果を Tab. 1 に示した。自己の性役割観において、女性特性項目でありながら、「幼児保育の職業に就く」と「病院で看護職に就く」の項目が著しく低い。対男性においては、男性特性項目全般が高得点を、女性特性項目全般が低得点を示しているのに対し、対女性においては、女性特性に低得点項目がみられ、男性特性項目全般がやや高得点となっている。そのため差の得点は、男性特性項目では小さく、女性特性項目では大きくなっている。対男性得点と対女性得点間の差の検定をおこなったところ、男性特性項目では、「指導力のある」、「結論を下す」、女性特性項目では、「食事の後片をする」、「子供の世話をよくする」、以上4項目での差が有意とならなかった。

Tab. 2 自己の性役割観、性別に対する態度尺度における因子負荷量

	自 己		対 男 性		対 女 性		差	
	I	II	I	II	I	II	I	II
男性特性項目								
たくましい	.45	.03	.56	.09	.51	-.06	.27	-.33
決断力のある	.53	.06	.69	.07	.57	.19	.16	-.58
頼もしい	.67	.26	.70	.03	.53	.19	.14	-.53
行動力のある	.68	.09	.65	.01	.59	.21	.12	-.57
指導力のある	.61	.16	.53	-.02	.57	.21	.15	-.35
大きな責任をもつ仕事に就く	.64	.17	.58	-.14	.65	.19	.02	-.47
家計の主たる収入をかせぐ	.35	.15	.58	-.17	.59	.01	.37	-.32
結論を下す	.56	.14	.46	-.02	.58	.14	.19	-.28
企業で高い地位につく	.60	.13	.58	-.11	.61	.09	.10	-.52
異性を積極的にリードする	.40	.06	.58	-.02	.53	-.08	.44	-.33
家庭内での大工仕事をする	.34	.27	.67	.20	.45	-.05	.54	-.30
肉体をきたえる	.35	.14	.52	.07	.48	-.01	.41	-.18
多くの社会活動に参加する	.40	.30	.49	.38	.48	.37	.16	-.41
知的能力の要求される仕事に就く	.52	.21	.52	.12	.63	.20	.08	-.42
経済的、社会的自由を得る	.43	.11	.37	.13	.50	.11	.15	-.32
女性特性項目								
こまやかな	.29	.44	.17	.38	.25	.44	.26	-.07
おとなしい	-.29	.02	-.20	.31	-.06	.23	.19	-.12
繊細な	.21	.28	-.01	.27	.14	.41	.25	-.07
献身的な	.26	.39	.33	.24	.17	.45	.15	-.37
育児のために仕事を辞める	-.16	.30	-.19	.53	-.10	.47	.42	-.19
化粧をする	-.02	-.01	-.42	.31	-.08	.48	.40	.10
家族のために毎日食事を準備する	.20	.58	.07	.65	.09	.73	.54	-.10
掃除や洗濯をする	.11	.57	.10	.69	.10	.73	.55	-.14
職場でのお茶をいれる	-.12	.26	-.02	.64	.01	.39	.34	-.04
食事の後かたづけをする	.04	.44	.13	.64	.15	.70	.38	-.11
幼児保育の職業に就く	.15	.51	.32	.63	.21	.61	.46	-.24
編物をする	.16	.36	-.12	.68	.09	.59	.59	.01
病院で看護職に就く	.29	.40	.47	.58	.30	.60	.40	-.35
子どもの世話をよくする	.22	.53	.46	.35	.24	.48	.07	-.38
固有値	6.65	4.46	6.65	4.46	6.39	4.05	4.58	2.66

2. 各項目の差得点

対性別態度を知るために、各項目を対象が男性である場合の得点と対象が女性である場合の得点を対とし、その差を計算した。対男性と対女性の得点の高低は一貫したものではない。よって、これらの差は絶対値に変換し、これを対象の性別による差得点とした。Tab. 1に各差得点の平均と標準偏差を示した。

自己の性役割観、他者への性役割意識（対男性、対女性）、対性別態度それぞれについて、因子分析をおこなった結果を Tab. 2 に示した。なお、これら29項目には、否定的評価や感情を生じる項目が含まれておらず、過去の研究からも、因子間での相関が予想されるため、オブミリン回転をかけた。性役割観、対男性、対女性においては、第 I 因子は男性特性に一致する。第 II 因子は、女性特性と大筋で一致するものの、曖昧な項目も少なくない。差得点の因子は、男性特性や女性特性と一致しない。

3. 性役割観、性役割意識、対性別態度得点

合成得点を作るにあたり、全項目間相関や Cronbach の α 計数を調べた結果、女性項目の「おとなしい」は、著しく異なる傾向を示し、合成変数として使用するには

問題があることが判った。よって、今後の分析では、この項目を除外する。各合成得点の平均および Cronbach の α を Tab. 3 に示した。

3-1. 自己への性役割観

自己への性役割観得点の算出は、従来の性役割を二次元として捉える方法を踏襲したものである。男性特性15項目、女性特性13項目それぞれの平均値を合成得点として使用した。合成得点の作成方法としては、因子分析の結果を踏まえ、因子得点を使用することも考えられる。しかし、対象の性別によって、また今後の研究を視野に入れると、被験者の性別によっても、因子構造に差異あるため、平均値を使用した。

男性特性と女性特性の差を知るために検定をおこなったところ、 t 値は -6.81 となり 1% 水準にて有意となり、女性特性のほうが高かった。

信頼性係数 α は女性特性得点で $.64$ と少々低い、男性特性得点では $.82$ と高い。いずれも尺度として使用することに問題はないと判断した。

Tab. 4 性役割観、性役割、対性別態度、ステレオタイプ、クロスタイプ、AWS 得点間の相関

		性役割観		対男性		対女性		対性別態度	ステレオタイプ	クロスタイプ
		男性特性	女性特性	男性特性	女性特性	男性特性	女性特性			
性役割観	女性特性	.25**								
対男性	男性特性	.07	.15							
	女性特性	.07	.10*	.12*						
対女性	男性特性	.17**	-.02	.21**	.40**					
	女性特性	-.05	.19**	.56**	.24**	.20**				
	性別態度	-.09	.02	-.13**	-.45**	-.15**	-.03			
	ステレオタイプ	.01	.19**	.90**	.20**	.23**	.87**	-.10*		
	クロスタイプ	.12*	.06	.19**	.84**	.83**	.26**	-.36**	.26**	
	AWS	.12	-.14*	-.02	.17*	.27**	-.06	-.19**	-.05	.26**

*p<.05 **p<.01

3-2. 他者への性役割意識

他者への性役割意識の算出も、従来の性役割を二次元として捉える方法を踏襲した。先の自己への性役割観と同様に、男性特性15項目、女性特性13項目それぞれの平均値を合成得点として使用した。

男性特性と女性特性間での差の検定をおこなったところ、対男性ではt値は25.10となり、男性特性のほうが非常に高いという1%水準での差を示した。しかし、対女性では有意差がみられなかった。

これらの合成変数についてCronbachの α をみると、.82以上となっており、高い信頼性を示している。

3-3. 対性別態度得点

対性別態度得点は、男性に対する態度と女性に対する態度の差を表す。つまり、性別を「位置」として重視するか否かを表す得点である。同一項目の差(対象者男性の得点-対象者女性の得点)を計算した結果を絶対値に変換し、28項目の差得点を合計した。 α 係数は.80と高く、信頼性をもつ合成変数となっている。

3-4. ステレオタイプ得点とクロスタイプ得点

先の性役割意識得点をもとにステレオタイプを反映する得点を作成した。性役割に一致する特性、つまり対象者男性に対する男性特性得点と対象者女性に対する女性特性得点を加算し項目数で割ったものがステレオタイプ得点となる。逆に、性役割に交差した得点、つまり、対象者男性に対する女性性得点と対象者女性に対する男性性得点を加算し項目数で割ったものがクロスタイプ得点となる。双方のCronbachの α は、.87以上と非常に高い。

3-5. 性役割観、性役割意識、対性別態度、ステレオタイプ、クロスタイプ得点間の相関

性役割観、性役割意識、対性別態度、ステレオタイプ、クロスタイプ得点間の相関(Pearsonの相関係数)をTab.

Tab. 3 合成得点の平均と信頼性

	MEAN	(SD)	cronbach α
性役割観：男性特性	2.81	(0.53)	.82
性役割観：女性特性	3.02	(0.49)	.68
対男性：男性特性	4.12	(0.53)	.87
対男性：女性特性	3.26	(0.55)	.82
対女性：男性特性	3.92	(0.48)	.85
対女性：女性特性	3.88	(0.52)	.84
性別態度	0.88	(0.33)	.80
ステレオタイプ	4.01	(0.46)	.90
クロスタイプ	3.61	(0.43)	.87

4に示した。

自己への性役割観における男性特性と女性特性は互いに正の相関($r=.25$, $p<.01$)をもつ。自己への性役割観における男性特性は、一般的な女性に対する男性特性($r=.17$, $p<.01$)と、クロスタイプ($r=.12$, $p<.05$)と正の相関をもつ。一方、自己への性役割観における女性特性は、一般的な男性に対する女性特性($r=.10$, $p<.05$)、女性に対する女性特性($r=.19$, $p<.01$)およびステレオタイプ($r=.19$, $p<.01$)と正の相関をもつ。

一般的な男性に対する男性特性と女性特性、女性に対する男性特性と女性特性は正の相関をもつ(対男性 $r=.12$ 、対女性 $r=.14$ 、双方 $p<.01$)。ステレオタイプに一致する対男性の男性特性と対女性の女性特性、逆にステレオタイプに反する対男性の女性特性と対女性の男性特性は、双方高い正の相関をもつ(ステレオタイプ一致 $r=.56$ 、不一致 $r=.40$ 、双方 $p<.01$)。男性に対する男性特性と女性に対する男性特性、男性に対する女性特性と女性に対する女性特性も正の相関をもつ(男性特性 $r=.21$ 、女性特性 $r=.24$ 、双方 $p<.01$)。

対性別態度は、一般的な男性に対する女性特性($r=-.45$, $p<.01$)およびクロスタイプ($r=-.36$, $p<.01$)と強い負の相関を、男性に対する男性特性($r=-.13$ 、 $p<.01$)および女性に対する男性特性($r=-.15$, $p<.01$)、

Tab. 5 AWS を従属変数とした重回帰分析結果

	標準化係数 β
性役割観：男性特性	.10*
性役割観：女性特性	-.10
R Square 1	.03
Adjusted R Square 1	.02
ステレオタイプ	-.12*
クロスタイプ	.27**
R Square 2	.13
Adjusted R Square 2	.12
対性別態度	-.18**
R Square 2	.16
Adjusted R Square 2	.15

* $p < .05$ ** $p < .01$

ステレオタイプ ($r = -.10, p < .05$) と弱い負の相関をもつ。

ステレオタイプとクロスタイプは正の相関 ($r = .26, p < .01$) をもつ。ステレオタイプは、一般的な男性に対する男性特性 ($r = .83$) と女性に対する女性特性 ($r = .87$) と非常に高い、一般的な男性に対する女性特性 ($r = .26$) と女性に対する男性特性 ($r = .26$) とは一定レベルでの正の相関をもつ (いずれも $p < .01$)。その逆に、クロスタイプは、一般的な男性に対する女性特性 ($r = .84$) と女性に対する男性特性 ($r = .83$) と非常に高い、一般的な男性に対する男性特性 ($r = .19$) と女性に対する女性特性 ($r = .26$) とは一定レベルでの正の相関をもつ (いずれも $p < .01$)。

4. 性別に関する尺度と AWS

AWS の平均は 3.11 (SD=0.35) となった。Cronbach の α は、.79 である。

Tab. 4 に AWS 得点と、性役割観、性役割意識、対性別態度、ステレオタイプ、クロスタイプ得点間の相関を示した。AWS は、自己への性役割観の男性特性とは無相関だが、女性特性と弱い負の相関 ($r = -.14, p < .05$) を示す。性役割意識をみると、AWS は、ステレオタイプに一致する男性への男性特性と女性への女性特性とは無相関だが、ステレオタイプに一致しない男性に対する女性特性 ($r = .17, p < .05$)、女性に対する男性特性 ($r = .27, p < .01$) とは正の相関をもつ。AWS 得点は、ステレオタイプ得点とは無相関だが、クロスタイプ得点とは正の相関 ($r = .26, p < .01$) を示す。AWS と対性別態度は負の相関 ($r = -.19, p < .01$) を示す。

AWS 得点を従属変数とし、自己への性役割観男性特性得点、女性特性得点、ステレオタイプ得点、クロスタイプ得点、対性別態度得点を独立変数とし、重回帰分析をおこなった。分析においては、それぞれの変数カテゴ

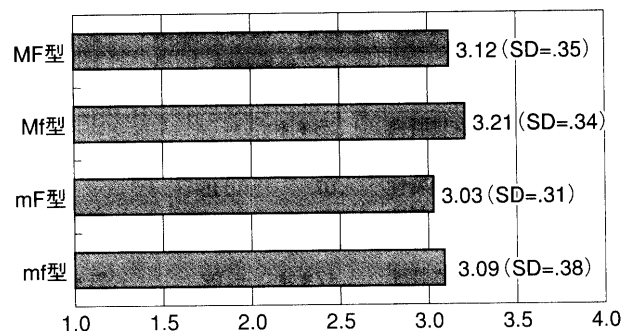


Fig. 1 性別タイプ別にみた AWS 平均値

リーの規定力を明らかにするため、性役割観、ステレオタイプ・クロスタイプ、対性別態度を階層的に投入し、決定係数 (R Square) の変化を調べた。Tab. 4 は、各段階ごとの決定係数と最終段階での標準偏回帰係数 (β) の値をまとめたものである。AWS の分散を有意に説明している変数は、標準偏回帰係数の値でみると、自己への性役割観男性特性 ($\beta = .10, p < .05$)、ステレオタイプ ($\beta = -.12, p < .05$)、クロスタイプ ($\beta = .27, p < .01$)、対性別態度 ($\beta = -.18, p < .01$) である。修正決定係数 (Adjusted R Square) の値をみると、第一ステップでは .02 ($p < .01$) と低く、自己への性役割観の説明力は高いものではないことを示している。一方、第二ステップ、12、第三ステップ、15 となっており (いずれも $p < .01$)、他者に期待する性役割に基づく合成得点の説明力は非常に高いことを示している。対性別態度の説明力は最も大きなものとはならなかった。

5. 両性性理論に基づく分析

両性性理論に基づく分析方法を使用して、性役割観と AWS の関係を調べた。自己への性役割観得点男性特性、女性特性双方の平均値を使用し、平均値以上の高位群、平均値以下の低位群に 2 群分けした。さらに、男性特性と女性特性の双方が高位群を MF 型 ($n = 102$)、男性特性高位群かつ女性特性低位群を Mf 型 ($n = 71$)、男性特性低位群かつ女性特性高位群を mF 型 ($n = 76$)、双方が低位群を mf 型 ($n = 110$)、以上 4 分割した。AWS 得点について、これらの群間差を調べたところ、F 値は 3.49 となり 5% 水準にて有意となった。Tukey 法 5% 水準により、2 対それぞれを調べたところ、mF 型と Mf 型の差のみが有意となった。これらの結果は、Fig. 1 に示した。

V. 考察

1. 性別に関する項目

自己の性役割観において、女性特性項目でありながら、「幼児保育の職業に就く」と「病院で看護職に就く」の項目が著しく低かった。これは、被験者が既に文化系の

大学に進学をしており、幼児保育、看護職といった高等教育課程において専門教育を要する職に就く可能性が皆無に近いのだと思われる。今後、他者に対する性役割意識のみでなく、自己に関わる性役割観にも同一項目を使用する場合、このような項目は避けるべきと考える。

一般的な男女に対する態度において、ステレオタイプの反応もみられたが、その一方で、男女ともに男性特性が高く評価される傾向があった。これは、佐野（1992）の研究結果と一致する。現代社会においては一般に、表出的能力より道具的能力のほうが高く評価されることが多い。また、女性が自己の性と異なる男性特性を高くもつても低い評価に繋がらないが、男性が女性特性を高くもつ場合は低い評価を受ける。これらの背景から、男性特性が高く評価される結果となったと思われる。

2. 各項目の差得点

自己への性役割観、他者への性役割意識を測定するための29項目を因子分析したところ、第Ⅰ因子には、男性特性として採用した項目が高い負荷量を示したにもかかわらず、第Ⅱ因子には、女性特性として採用した項目であっても低い負荷量としかならないのがみられた。この結果も、佐野（1992）と一致している。これらは、かつては女性特性としてポジティブな評価を受けた特性であっても、昨今ではネガティブな評価に繋がるようになった、または、女性の特徴として認知されることが少なくなったことを示す。社会の変容は、女性特性の形骸化やさらには消失もたらしつつあると思われる。

3. 性役割観、性役割意識、対性別態度得点

自己への性役割観の結果をみると、男性特性より女性特性のほうが高かった。被験者のすべてが女性であることから、根強い性役割観が残っていることが判る。

女性特性得点の信頼性がやや低かった。これは、上記の女性特性の変容を支持する結果と思われる。

他者への性役割意識において、男性特性と女性特性間に、男性に対しては大差があるのに対し、女性に対しては差が見られなかった。この結果も、男女を問わず、男性特性が高く評価されていることによると思われる。

信頼性をみると、対性別態度得点、ステレオタイプ、クロスタイプ得点とも高く、尺度として使用可能であることが判った。

4. 性役割観、性役割意識、対性別態度、ステレオタイプ、クロスタイプ得点間の相関

自己への性役割観における男性特性と女性特性は正の相関をもった。また、一般的な男性および女性に対する男性特性と女性特性も正の相関をもった。さらには、ステレオタイプとクロスタイプも正の相関をもった。29項目を選択する過程において、ポジティブな意味をもつものを選択したため、このような結果になったと思われる。

自己への性役割観における男性特性は、一般的な女性に対する男性特性およびクロスタイプと正の相関をもつ。また、自己への性役割観における女性特性は、一般的な男性に対する女性特性、女性に対する女性特性およびステレオタイプと正の相関をもっている。これらの結果から、男性特性への態度がクロスタイプの、女性特性への態度がステレオタイプの決め手となると予測できる。

ステレオタイプに一致する、男性への男性特性と女性への女性特性、逆にステレオタイプに反する男性への女性特性と女性への男性特性は、高い正の相関をもった。これらの結果は、性別に関わる研究をおこなう場合、男性特性、女性特性を二次元として測定するのではなく、ステレオタイプに一致するか否かという一次元で測定することの有効性を示唆するものである。

男性に対する男性特性と女性に対する男性特性、男性に対する女性特性と女性に対する女性特性も正の相関をもった。これらは、被験者が対象の性別にとらわれず、かつ各特性を性別特性としてではなく、単なる道具的、表出的特性として認知している可能性を示唆している。

対性別態度は、一般的な男性に対する女性特性およびクロスタイプと強い、女性に対する男性特性と一定レベルの負の相関を示した。この結果は、性別にとらわれた態度を有する者は、社会通念での性別特性にとらわれることを示しており、対性別態度尺度の妥当性を表すものである。ただし、対性別態度は、ステレオタイプおよび男性に対する男性特性とも負の相関を示している。佐野（1990c、1991b）の研究では、企業に就業する女性のうち、男女平等意識が高い者は、男性特性得点を対男性より対女性で、女性特性を対女性より対男性で、高く評価するという逆転した回答傾向を見いだしている。男女平等への過渡期における反動的な反応が、このような予想外の相関をもたらしただのかもしれない。

ステレオタイプは、対男性の男性特性と対女性の女性特性に対して高い正の相関を示した。その逆に、クロスタイプは、対女性の女性特性と対男性の男性特性に対し高い正の相関を示した。これらの結果は、概念的にも、合成変数の作成手順からも予測できることである。

ステレオタイプは、対男性の女性特性と対女性の男性特性に対して、クロスタイプは、対男性の男性特性と対女性の女性特性に対して、一定レベルの正の相関を示した。これらの結果は、項目がポジティブな内容でそろえられたことに起因すると思われる。

5. 性別に関する尺度と AWS

第一に、自己への性役割観と AWS の関係を見る。女性特性とは弱い負の相関を示したが、男性特性とは無相関であった。この結果から、自己の性別特性と男女平等意識はあまり関連をもたないことが判る。

第二に、他者への性役割意識と AWS の関係を見る。性役割意識のうち、ステレオタイプに一致する男性への

男性特性と女性への女性特性は、AWS と無相関であった。しかし、ステレオタイプに反する男性に対する女性特性、女性に対する男性特性とは正の相関をもっていた。

ステレオタイプ得点と AWS 得点は無相関だが、クロスタイプ得点とは正の相関を示していた。よって、男女平等意識とクロスタイプ得点は、正の相関を示すという作業仮説 2 は支持されたが、男女平等意識とステレオタイプ得点は、負の相関を示すという作業仮説 1 は棄却された。

以上の結果から、伝統的な性役割意識をもつ者は、男女平等意識が低いという仮説 1 は、一部しか支持されなかったことになる。男女平等意識は、ステレオタイプに反する特性を高く評価するか否かという、ともすれば逸脱行動を強化しかねない意識と関わりをもっていることになる。性別に関わる問題を論じる場合、「伝統的か否か」という表現を使用されることが多い。しかし、性別に関わる社会変化には、伝統的なもの、古典的なもの自体が直接的に変容するのではなく、新たな価値観、概念が発生し、その浸透によって、既存のものが影響力を失うという、間接的変容プロセスが存在するのかもしれない。

AWS と対性別態度は負の相関を示し、作業仮説 3 を支持した。よって、性別にとらわれない態度を有する者は、男女平等意識が高いという仮説 2 も支持されたことになる。

対性別態度の妥当性・有効性を調べるため、AWS 得点を従属変数、自己への性役割観男性特性得点、女性特性得点、ステレオタイプ得点、クロスタイプ得点、対性別態度得点を独立変数とし、重回帰分析をおこなった。その結果、対性別態度は AWS に対して、有意かつ高い説明力を有していることが判った。ただし、説明力の強さは、対性別態度よりクロスタイプのほうが高かった。この結果は、先述の佐野の先行研究と一致する。

なお、両性性理論に基づく方法にて、性役割観と AWS の関係を調べたが、Mf 型が最も高く、mF 型が最も低いという結果になり、MF 型は中間となった。両性性理論は適応を説明するものであり、男女平等意識が MF 型で高くならなかったからといって、この理論を否定する根拠とはならない。場合によっては、男女平等意識が高くも低くもない者が、現代社会においては最も適応しているとも考えられる。しかし、先にも述べたように、女性特性の測度の妥当性に揺らぎがみられる現在、二次元クロスによって、被験者を分類する方法には、限界があると思われる。

6. 結語

本研究の第一目的は、対性別態度尺度の妥当性、信頼性を検討することであった。他の性別に関わる尺度や、男女平等意識尺度との関連をみた結果、対性別態度尺度の妥当性および信頼性が、一定水準以上で認められた。

しかし、項目の精製が今後の課題として残った。また、先行研究と同様、クロスタイプ得点は、対性別態度得点より高い説明力をもつことも判った。第二の目的は、性別に関する研究をおこなう場合、使用する尺度は一次元、二次元のいずれが有効であるかを検討することであった。結果は、二次元としての枠組みをもつ尺度より、対性別態度尺度、クロスタイプ尺度のような一次元尺度のほうが説明力をもつことを明らかとした。第三に、性別に関わる変数と男女平等意識の関連について仮説検証をおこなったが、平等意識は、伝統的な性役割を有するか否かではなく、対人認知において性別を意識する程度や、ステレオタイプに反した行動や特性への態度によって説明されることが判った。

今後は、男性被験者も含めた上で、性別に関わる研究に有効な尺度の開発を続けると同時に、性別に関わる認知や態度が変容するプロセスを、多岐の視点から探っていきたい。

VI. 引用文献

- Bem, Sandra Lipsitz 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Counseling and Clinical Psychology* Vol.42 No.2:155-162
- Bem, Sandra Lipsitz 1975 Sex Role Adaptability. *Journal of Personal and Social Psychology* Vol.31 No.4:634-643
- Bem, Sandra Lipsitz 1981 Gender Schema Theory: A Cognitive Account of Sex Typing. *Psychological Review* Vol.88 No.4:354-364
- Dreyer, N.A., Woods, N.F., & James, S.A. 1981 ISRO: A Scale to measure sex-role orientation. *Sex Role* Vol.7 No.2:173-182
- Hare-Mustin, R.T., & Marecek, J. 1988 The meaning of difference: Gender theory, postmodernism, and psychology. *American Psychologist* Vol.43:455-464
- 佐野幸子 1990a 性別に対する態度の研究—女性就業者の場合愛知学院大学大学院文学研究科修士論文
- 佐野幸子・若林満 1990b 働く女性の男女平等意識—男女雇用機会均等法施行 5 年後の実状経営行動科学第 5 巻第 2 号 99-111
- 佐野幸子 1990c GENDER ATTITUDE からみた女性就業者の男女平等意識日本社会心理学会第 31 回大会発表論文集 10-11
- 佐野幸子 1991a 性別態度と男女平等意識—大学生の場合—日本心理学会第 55 回大会発表論文集 655
- 佐野幸子 1991b 性別態度と男女平等意識—働く女性の場合—日本社会心理学会第 32 回大会発表論文集 351-354
- 佐野幸子 1992 性別態度 (GENDER-ROLE-ATTITUDE) と男女平等意識日本社会心理学会第 33 回大会発表論文集 230-233
- Seward, G.H. 1946 *Sex and Social order*. McGraw-Hill
- Seward, G.H. 1956 *Psychotherapy and Culture Conflict*. Ronald
- Spence, Janet T., & Helmreich, Robert, R. 1972 The Attitude Toward Women Scale: An objective instrument to measure attitude toward the rights and roles of women in contemporary society. *Journal Supplement Abstract Service Catalog of Selected Documents in Psychology* Vol.26:6-67
- Spence, Janet T., & Helmreich, Robert 1978 *Masculinity and Femininity: Their Psychological Dimensions, Conflates, and Antecedents*. Austin: University of Texas Press.
- 若林満鹿内啓子後藤宗理 1982 キャリア発達と職業自己像—女性専門職の場合—名古屋大学教育学部紀要 Vol.29 No.13 7-155